

# Astrid Lindgren : 『長くつ下のピッピ』に描かれた子ども像を再考する

スウェーデン語専攻 吉良美祐

## 目次

1. はじめに
  2. 作品紹介
    - 2.1. 作品成立背景, ピッピ以前の児童文学との比較
    - 2.2. あらすじ
  3. 作者紹介
    - 3.1. 作者の生涯
    - 3.2. 子どもの権利保護活動
  4. 『長くつ下のピッピ』に描かれる登場人物
    - 4.1. ピッピとピッピの周辺の子ども
    - 4.2. ピッピとピッピの周辺の大人
    - 4.3. 主体としてのピッピ
  5. スウェーデンと日本における「子ども＝主体」の受容について
    - 5.1. スウェーデンの場合
    - 5.2. 日本の場合
  6. まとめ—今日的意義
- 使用テキスト
- 参考文献
- インターネット上の資料

## 要約

Astrid Lindgren(1907-2002)は、世界中で不動の人気を保つスウェーデンの児童文学作家である。彼女は子どもの視点から物語を描き、130 作以上の児童文学作品を残したことから「子どもの本の女王」と呼ばれた。また、彼女は児童文学以外に、子どもの人権活動などの社会問題においても活躍し、先駆的な存在であった。彼女の代表作である Pippi Långstrump『長くつ下のピッピ』は 1945 年にスウェーデンで出版され、その後 70 年以上経った現在でも人々を魅了し続けている。当作品では、子どもであるピッピに主体性を与えて描いており、理想の子ども像が示されている。しかし初版が出版された当時、子どもの人権についての議論の焦点は子ども本人に当てられていなかった。その後子どもの権利に関する議論は世界的に進んだものの、当作品で示された理想像は未だに達成されていない。

よって本稿では、今後子どもを取り巻く環境の改善を実現させるため、当作品に描かれた「子ども像」を考察した。また、現代では社会全体が急激に変化している。そこで本稿の考察によって、現代の理想の子ども像を更新することも目的としている。

本稿では当作品に描かれた「子ども像」を再考するにあたり、まず作品紹介・作者紹介を通して当作品が出版された背景を明らかにした。次に登場人物の分析から、実際に Lindgren がピッピを通してどのように「子ども＝主体」を描き出したのかを考察した。最後に当作品で描かれた「子ども像」がスウェーデン並びに日本において、どのように受容されてきたのかを明らかにし、まとめとして本稿の今日的意義を述べた。

作品紹介では、『長くつ下のピッピ』は Lindgren が娘の Karin のために即興で作った話が基になっていることを示し、初版が出版される以前の児童文学と比較することによって、当作品が子どもに主体が置かれて描かれているという点において、画期的であったということを明らかにした。続く第 3 章の作者紹介では、作者の生涯を振り返り、Lindgren が児童文学の世界に留まらず現実世界へ影響を与えていたことを述べた。また、彼女の子どもに対する思いをより理解するため、ドイツ書店協会平和賞授賞式とライト・ライブリフッド賞授賞式で行ったスピーチを振り返った。そこでは今後の世界を作っていく子ども達を大人は愛情を持って育てなければならないという強い危機感が感じられた。

第4章では当作品に描かれる登場人物を子ども・大人・ピッピに分けて分析し、登場人物が果たしている役割とピッピの主体性について考察した。物語に登場する子ども達は読者と同じ一般的な子どもであり、ピッピと対照的に描かれている。そのことによってピッピの存在を際立たせ、読者とピッピとの架け橋の役割を担っている。一方で当作品には大人の権威を振りかざす大人が多く描かれている。そのような大人の愚かさをピッピが指摘し、権威が瓦解する様子が喜劇的に描かれている。またピッピの言動を分析することで、ピッピは子どもであっても自分で考えることができ、その考えに基づいた行動を取るという点から主体性があるといえるだろう。第4章を通じて、子どもが主体性を持つことは必要であるが、子どもと大人は同等な能力を持つものではないため、大人と子どもが尊重し合い、相互補完の関係にある世界をLindgrenは描き出しているということが明らかになった。

第5章では当作品並びに当作品で描かれた「子ども像」がスウェーデンと日本においてどのように受容されていったのかを明らかにした。スウェーデンでは当作品によって様々な論争が巻き起こったが、子どもの権利に関する論争を前進させたことは間違いない。賛否両論を受けながらも現在では、ピッピは自己の主体性に関する理想像となり、成長過程に必要な要素として受容されている。また、Lindgrenの主張は社会全体に大きな影響を与え、社会問題の先駆的な人物として受け入れられていることが明らかになった。一方日本では、子どもの主体性を重要視する動きはスウェーデンと比べて遅れていた。当作品が人気を博した後でも、教育現場の子ども観は依然として旧いものであったが、現在では子どもの権利活動の思想が周知されている。子どもの権利活動において当作品が理想像として用いられた例からも、当作品は日本においても子どもの権利に関する先駆的なモデルとして社会に影響を与えていることが窺える。

本稿ではLindgrenが当作品に描いた「子ども像」を考察したが、この理想像は現実社会では達成されていない。急激な国際化・情報化が進む現代社会において、子どもの主体性はより重要である。よって当作品の「子ども像」の根幹である子どもと大人の相互補完の関係は、現代でも応用され得るものであろうと結論付けることが出来た。